

基肄城築造1350年

基肄城を知る⑦

— 基肄城の瓦と瓦窯 —

左の写真は、基肄城から出てきたモノですが、いったい何でしょうか？

正解は瓦です。基肄城の城内には、これまでの調査により、約40棟の礎石建物跡が確認されており、それらの屋根に葺かれていたものが瓦です。屋根に瓦を葺くことにより、建物内を風雨から守ることができます。

現在では、多くの家で瓦が使用されていますが、基肄城がつ



百済系軒丸瓦と重弧文系軒平瓦（大礎石群出土）

くられた時代には、限られた建物しか使用されていなかったようです。一般的な住居があった集落の遺跡では、瓦が出土することが稀であり、板屋根など簡易なものであったと考えられています。その一方で、役所（官衙）の遺跡では、瓦葺きの建物が多く確認されています。このようなことから、集落と官衙の建物では、様子が大きく異なっていることが分かります。つまり、基肄城の瓦葺建物は、その当時の進んだ建築技術が導入されたものであり、国や地方の役所に深く関わった威厳あるものであるといえます。

この写真の瓦には、文様が描かれており、写真上部の丸い形をしたものは「軒丸瓦」、写真下部の半円形をしたものは「軒平瓦」といいます。どちらも、建物の屋根の下端、最も外側にあたる「軒」に葺かれたものです。



建物の屋根を見上げたときに、一番目につくところに設置されたもので、荘厳な雰囲気醸し出していたことが想像できます。実は、この写真の軒丸瓦に描かれた蓮の花のような文様のルーツは、韓半島の「百済」にあるともいわれています。百済にあったお寺や城などから出土した瓦に文様が似ているためです。百済

といえば、基肄城築造にも深く関係していることが文献から分かっています。考古資料からもそのようなことを想定できる資料の一つがこの瓦といえます。ちなみに、百済の瓦については、現在、九州国立博物館で開催されている特別展示「古代日本と百済の交流」

（3月1日まで）において、展示されていますので、自分の目で確認されてみてはいかがでしょうか？

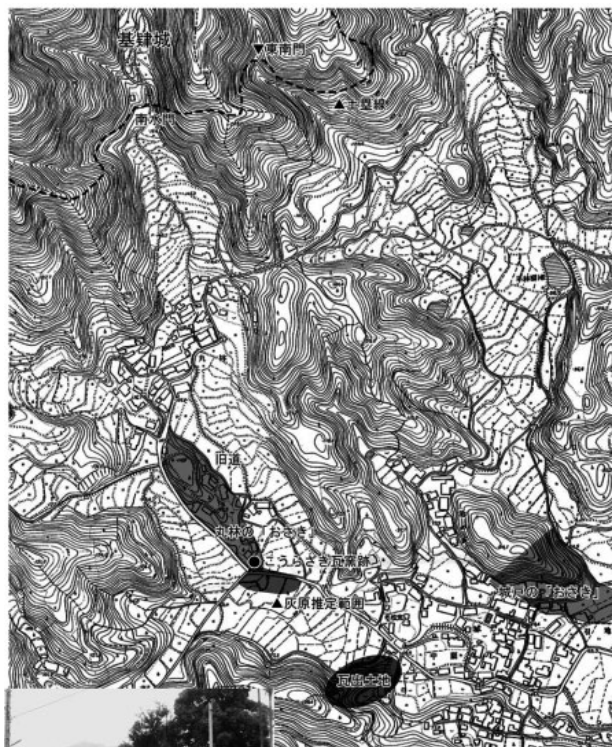
最後に、基肄城の瓦はどこでつくられたものでしょうか？詳しくはまだよく分かっていません。

しかし、町内には「こうらざき（かわら崎）瓦窯」という遺跡があります。基肄城南門（水門）から南東の位置にあります。未調査であるため詳しくは分かりません。しかし、地域の人々の伝承では、「灰がでるから掘ってはいかん。」と言い伝えられ、

守れてきたところであり、実際に灰や瓦が出土したともいわれています。このようなことから、基肄城に供給した瓦を生産した瓦窯であった可能性が想定できます。このほかにも、丸林や仁谷寺でも瓦窯の存在が考えられています。こちらもよく分かっておりません。

今後、さらなる調査や研究によつて、瓦が基肄城に関わる新たな事実を教えてくださいませんか。

※問合せ先 教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-2200



こうらざき瓦窯跡（左写真）とその周辺の地形図（上）

（基山町教育委員会2011『基山町史』資料編より転載）

